

走れメロス

原作
太宰治
戯曲
永山智行

登場人物

ボク／オウジ
俳優 1
俳優 2
俳優 3
俳優 4
俳優 5

走る男。

別の男が、走る男を追いかけ走ってくる。

別の男 ああ、メロス様。

走る男 誰だ。

別の男 フィロストラトスでございます。貴方のお友達セリヌンティウス様の弟子でございます。

走る男 ああ、お前か。

別の男 もう、駄目でございます。むだでございます。もう、やめて下さい、走るのは。もう、あの方をお助けになることは出来ません。

走る男 いや、まだ陽は沈まぬ。

別の男 ちようど今、あの方は死刑になりました。

走る男 (足を止めて) え?……ほんたうか?

別の男 ええ。つい今しがた。もうちよつとでも、早かつたなら、間に合つたのでせうが……。もう、駄目でございます。むだでございます。／しゅーりよー

走る男、立ちすくむ。

—— GAME OVER.

ボク／オウジ、がいる。

オウジ ぼく

くつ

つめ

めやに

にのうで

でんぶ

ぶんそうおう

うなじ

じゆうにしちよう

うなづく

くすりゆび

びていこつ

つまさき

きようかいせん

……あ

けんさく

けんさく

けんさく

ぼく

けんさく

ぼく

を

けんさく

する

ぼく

は

ぼく

を

けんさく

する

ぼく

の

ありか

を

けんさく

けんさく

けんさく

——鼻がね、長過ぎだと思ふ。眼が小さくつて、眉も、太すぎて、で、うーん、歯ならびもね……、うん、あ、それと、猫脊。性格だつて、めめしいつていうか、ひとの陰口ばかり気にしてて、いつつ、なんかいらいらしてて……

——俺、あいつ、苦手。小さい時から、一緒に遊んでたから知ってるけど、なんか、利巧で、なんでもうまいんだけど、うーん、あきつぽいっていうか、他人の心の裏を覗くのが素早くて、なんか、にやにやしてるし……

——くるしいとか、淋しいとかっていう言葉は、男の子はね、あんまり口にしてない方がいいと思うよ、先生。くるしいのは、あなただけじゃないんだからね。もつと、しつかりして……

——お父さんだつて、頭はよくなかったよ。馬鹿だった。でもな、だから、お父さんは、お前にだけは失敗させたくないと思ってるんだよ。お父さんは、お前の役に立ちたい。お父さんが失敗して学んだことをお前に教えて、お前を守りたいと思ってるんだよ。な……

——あの子はね、馬鹿な子なんです。甘えっ子なんです。私もね、大事な一人きりの子だし、なんでもあの子の好きなようにさせて育ててきたんですが、でも、それが、あの子の為に、よくなかったんでしょね。いつまでも私たちがを頼りにして、甘えてばかりで。本当に、ね、将来どうなるのか……

オウジ 馬鹿だ

馬鹿だ

馬鹿だ

僕は

大馬鹿

野郎だ

いったい

なんの

為に

生きて

いる

のか

朝

起きて

食事

をして

うろろうろ

して

夜になれば

寝る

そうして

いつも

考えて

いる

僕の

空想

夢想

の

胃袋は

ひとの五倍も広くて

十倍も貪慾だ

満腹

という事を

知らない

もつと

もつと

もつと

と

強い刺戟を

求める

けれども

僕は臆病で

なまけもの

だから

刺戟

への

あこがれ

だけで

終る

心の内

だけの冒険

家

書齋の中

の航海

者

僕は

とるにも

足らぬ

夢想

家

だ

馬鹿だ

大馬鹿

野郎だ

僕には

何も出来ない

何の役にも

立ちやしない

すみません

すみません

生れて

すみません

——だけど、あたしは、あの人を好きです。あの方は、情の深い人です。情が深いから、自分を、もてあましてしまつて、心も言葉も乱れるんです。

——だけど、俺は、あいつ、好きだよ。あいつは、情の深いやつだよ。情が深いから、自分を、もてあましてしまつて、心も言葉も乱れるんだと思う。

——だけど、先生は、あなたを好きです。あなたは、情の深い人です。情が深いから、自分を、もてあましてしまつて、心も言葉も乱れるんです。

——だけど、お父さんは、お前を好きだよ。お前は、情の深い子だ。情が深いから、自分を、もてあましてしまつて、心も言葉も乱れるんだよ。

——だけど、あたしは、あの子を好きです。あの子は、情の深い子です。情が深いから、自分を、もてあましてしまつて、心も言葉も乱れるんです。

オウジ もう、駄目でございます。むだでございます。もう、やめて下さい、

生きるのは。もう、どうにも、ならない……

ト、一座の連中がどかどかと入ってくる。

俳優2 間に合いました？大丈夫ですか？

オウジ ？

俳優3 いやあ、途中でちよつと大雨に降られましたね、橋は流されるわ、山賊に会うわで、もうくたびれてしまひまして、ちよいと一眠り、なんてしてたら、すつかり遅くなつてしまひまして。

俳優4 しかし、まあ、あれですよ。確かに、鼻はね、長過ぎだと思ひますよ。

眼だつて小さくて、眉も、太すぎて、まあ、服装もまづしく、容貌も愚なるに似てゐるますが、が、しかし、元来たものぢやありませんよ。

俳優5 さうさう、物語を創作するといふまことに奇異なる術を体得してゐらつしやいますからね。ね、オウジ。

オウジ？ボクの名前はソウジだよ。トシマソウジ。オウジじゃない。

俳優1 まあまあ、そんなことはさておき、どうです？オウジのその物語とやらをお聞かせ願えないでせうか。どんなものでも結構ですから。

オウジ あ、でも……

俳優1 ああ、さうですね、大変失礼しました。わたくしとしたことが申し遅れてしまひました。名乗りはわたくしたち俳優にとつて一番の大事、それを忘れるとは、わたくし歳をとりました。ははは。

俳優たち、ははは、と笑ふ。

オウジ 俳優、さん？

俳優1 まず、これに控えしは、我が一座の俳優の面々。とはいへ、身を持ちくずして、この一座へと流れたごりついた連中ばかり。嘶家くずれ(俳優2)、

大衆演劇の女形くずれ(俳優3)、ミュージカル歌手くずれ(俳優4)、浪曲師くずれ(俳優5)、そんなくずれにくずれた連中をとりまとめるのが、総く

ずれの総元締め、人間くずれ、つまり失格人間のあたし、といふわけです。

オウジ ………

俳優1 さあ、オウジ、いま、その胸に秘めたる物語とやらをお聞かせください。さすればわたくしたちが見事、劇に仕立てあげてご覧にいれませう。

俳優3 それでその物語の発端はどんなのです？

俳優たち、オウジに見入る。

オウジ、しまひには抗することができず、

オウジ えーつと、えーつとね、こういうんだ。

オウジ、語りだす。

オウジ 「メロスは激怒した。」

俳優2 さすがにオウジ、書き出しが巧いですね。

俳優4 書き出しの巧いといふのは、その作者の「親切」であります。

俳優3 それでそのメロスつていふのは誰です？

俳優2 野暮なこと言ふな。それは聞いてのお楽しみつてことだぜ。ね、オウジ。

オウジ まあ……

俳優2 とにかくまあ、そのメロ公は激怒してやがんだと、ね。

俳優5 気にせず、先をどうぞ。

オウジ (うなづく)「メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の」

俳優2 え、え、え、ちよつと待つてください。今なんて言いました？ じ

や、じゃ、じゃ……？

オウジ 「邪智暴虐の」

俳優2 じゃちぼー、……え？

オウジ 「邪智暴虐の」

俳優2 じゃちぼうぎやく、じゃちぼうぎやく、ん、何ですか、それ？なんかこ、お祓いの言葉なんかですか？

俳優3 あんたもわからない人だねえ。「じゃちぼうぎやく」つてのはね、

俳優2 おう、何だ？

俳優3 そりや、あんた、あれだよ。こ、なんてゆうか、こんな形のね、それでもつて、こ、うしたりとか、ね、

俳優5 「悪知恵を使い、むごいことをして人々を苦しめること」

俳優3 そう、それ。そういうこと。

俳優2 お前、ほんとに知つてたのか？

俳優3 もちのろんよ。

俳優1 (オウジに) どうか、続きを。おい、みんなも、まあ、しばらく黙つて聞いてくれ。

俳優たち はい。

オウジ 「メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。けふ未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやつて来た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の内気な妹と二人暮しだ。この妹は、村の或る律気な一牧人を、近々、花婿として迎へる事になつていた。結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆゑ、花嫁の衣裳やら祝宴の御馳走やらを買ひに、はるばる市にやつて来たのだ。先ず、その品々を買ひ集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があつた。セリヌンティウスである。今は此のシラクスの市で、石工をしてゐる。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく逢わなかつたのだから、訪ねて行くのが楽しみである。歩いてゐるうちに――

俳優1が立ち上がり、メロスを演じる。
歩きたす。

オウジ 「歩いてゐるうちにメロスは、まちの様子を怪しく思つた。ひっそりしてゐる。もう既に日も落ちて、まちの暗いのは当りまえだが、けれども、なんだか、夜のせいばかりでは無く、市全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になつて来た。路で逢つた若い衆をつかまえて――

俳優2が立ち上がり、「若い衆」になる。

メロス (俳優1) 何かあつたのか、二年まえに此の市に来たときは、夜でも皆が歌をうたつて、まちは賑やかであつた筈だが、

若い衆 (俳優2) (首を振る)

オウジ 「若い衆は、首を振つて答へなかつた。しばらく歩いて老爺に――

俳優3 「ろうや」つて……?」

俳優4 おじいさん。

俳優3 ああ。じやあ。

俳優3、「老爺」になる。

オウジ 「しばらく歩いて老爺に逢い、こんどはもつと、語勢を強くして質問した。」

メロス 何かあつたのか、二年まえに此の市に来たときは、夜でも皆が歌をうたつて、まちは賑やかであつた筈だが、

老爺 (俳優3) ………。

オウジ 「老爺は答へなかつた。メロスは両手で老爺のからだをゆすぶつて質問を重ねた。」

メロス (老爺のからだをゆすぶつて) 何かあつたのか、二年まえに此の市に来たときは、夜でも皆が歌をうたつて、まちは賑やかであつた筈だが、

老爺 ……王様は、…人を殺します。

メロス なぜ殺すのだ。

老爺 悪心を抱いてゐる、といふのですが、誰もそんな、悪心を持つては居りませぬ。

メロス たくさんの人を殺したのか。

老爺 はい、はじめは王様の妹婿さまを。それから、御自身のお世嗣を。それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、賢臣のアレキス様を。

メロス おどろいた。国王は乱心か。

老爺 いいえ、乱心ではございませぬ。人を、信ずる事が出来ぬ、といふのです。このごろは、臣下の心をも、お疑いになり、少しく派手な暮しをしてゐる者には、人質ひとりずつ差し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架にかけられて、殺されます。けふは、六人殺されました。

オウジ 「聞いて、メロスは激怒した。」

俳優5 なるほどねえ。なかなか面白いおはなしぢやありませんか。

オウジ 本場にそう思う？

俳優5 ええ。

俳優1 それでこのあとはどうなるんです？

オウジ うん。こういうんだ。メロスは——

俳優2 こういふんでしょ。あたしはもうすっかりわかつてしまいましたよ。

オウジ そう。んじや、メロス、やってみてください。

俳優2 へい。おまかせください。——そのメロスつて男、稀代のそそつかしい奴でして、まあ、そそつかしい男つていふのは世の東西を問わずいるもんでして……、そのおじいさんの話を聞くと、メロスはなんだかカーツと頭にきちやつて、「呆れた王だ。生かして置けん」つて言ふが早いか、そのままバタバタつて駆けだしちやつた。これがどこに行つたかといふと、そのまんなま王城にはいつて行つちやつた、しかもその市で買った買物、そのまんなま背負つた格好で。まあ、粗忽な人もあつたもんで……。さ、たちまちメロスは、巡邏の警吏にお縄頂戴つてことになつちまつて、で、これがまた、メロスの懐中からは短剣が出て来たんで、騒ぎが大きくなつちまつたといふわけで——。メロスは、早速王の前に引き出されたんですな。あの、「邪智暴虐」野郎の王の前に。

王 (俳優4) この短刀で何をするつもりであつたか。言へ！

メロス (俳優2) へい、その、あれです、市をね、ぼ、暴君の手から救うのだ。

王 おまへがか？

メロス へい

王 仕方の無いやつぢや。おまへには、わしの孤独がわからぬ。

メロス 言ふな……なんつて……

王 む？

メロス 人の心を疑ふのは、最も恥すべき悪徳だ。……なんて申しますがね、

王は、その、あれですよ、民の忠誠をさへ疑つて居られる。……とかなんとか、世間ぢや、あれですよ、言はれてますよ。

王 疑ふのが、正当の心構へなのだと、わしに教へてくれたのは、おまへたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。

メロス なるほどねえ

王 わしだつて、平和を望んでゐるのだが。

メロス そ、そいじやあ、あれですよ、その、ま、なんの為の平和だ、つてえ、話ですよ。いやいや、殿、怒つちやいけません。これ、あたしが言ふんじやないんです。その、なんかね、市に住んでる、D A Z A Iとかつて言ふ、作家がね、言つてんですから。自分の地位を守る為か、つて。罪の無い人を殺して、何が平和だ、つて。

王 だまれ、下賤の者。

メロス へい

王 口では、どんな清らかな事でも言へる。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまへだつて、いまに、磔になつてから、泣いて詫びたつて聞かぬぞ。

メロス ああ、王は惻巧だ。自惚れてゐるがよい。私は、ちやんと死ぬる覚悟で居るのに。命乞ひなど決してしない。……いや、あたしね、自分でも、なんでこんな強氣のこと言つてんだつて思つてんですよ。そんなんじやおめえ、殺されつちまうだろうつてね、でもそこはそれ、あれですよ、D A Z A Iさんがね……。ま、いいや、もう仕方ねえから、どうにでも好きなやうにしてください。あ、ただ、——

王 なんだ？

メロス ただ、私に情をかけたつもりなら、処刑までに三日間の日限を与へ

て下さいませんか。たつた一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰つて来ます。

王 ばかな。

メロス そううまつたくばかなんです。なら、はなつかからお城なんか来ることあねえじゃねえかつてね、うん、そりや道理ですよ、ただね、もう来らまつたもんはどうにもしようがねえつてわけで、

王 とんでもない嘘を言ふわい。逃がした小鳥が帰つて来るといふのか。

メロス こうなりやね、あたしも覚悟決めました。そうです。帰つて来るのです。いいですか、よく聞いてくださいよ。私を、三日間だけ許して下さい。

妹が、私の帰りを待つてゐるんです。おや、どうにも疑つていらしやるやうですね。よろしい、そんなに私を信じられないならば、この市にセリヌンテイウスといふ石工がゐます。私の無二の友人です。あれを、人質としてここに置いて行きませう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮まで、ここに帰つて来なかつたら、あの友人を絞め殺して下さい。たのむ、さうして下さい。

俳優2 なんて、ひどい奴があつたもんで……

王 (そつと北叟笑む)

メロス おや、いま、ニヤつてなさいましたね。それあれでしょ、きつとなんていふか、こんな……「生意気なことを言ふわい。どうせ帰つて来ないにきまつてゐる。この嘘つきに騙された振りして、放してやるのも面白い。さうして身代りの男を、三日目に殺してやるのも気がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。世の中の、正直者とかいふ奴輩にうんと見せつけてやりたいものさ。」つてそんなこと——

王 願ひを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目には日没までに帰つて来い。おくれたら、その身代りを、きつと殺すぞ。ちよつとおくれて来るがいい。おまへの罪は、永遠にゆるしてやろうぞ。

メロス な、なに、何をおつしやる。

王 はは。いのちが大事だつたら、おくれて来い。おまへの心は、わかつてゐ

るぞ。

俳優2 メロスは口惜しく、地団駄踏んだ。あんまり強く地団駄を踏んだもんだから、そこに水が溜まつて池なつちやつたとか……。地団駄池つていふ……。さて、竹馬の友、セリヌンテイウスは、深夜、王城に召された。ま、セリヌンテイウスにしてみれば、こんな迷惑な話はないんですが、そこがまた、類は友を呼ぶと申しますか、こちらもまあ、メロスに輪を掛けたやうな粗忽者でして……

メロス と、まあ、さういふわけだからセリ公、おめえ、ここはひとつ、おれの身代わりなつて——

セリヌンテイウス(俳優1) おう、わかつたわかつた、委細承知の介よ。おれが、なんだ、おめえの代わりに王に絞め殺されりやいいんだろ。まかしとけつてことよ。おらあな、まあ、他のことはさておき、絞め殺されるなんてのはよ、まあ餓鬼の頃から、一番得意でよ、ま、近所でも「絞め殺されやのセリちゃん」なんてんで評判だつたわけよ。

俳優3 あんたが話すと、どうもこの、品てものがなくていけないよ。

俳優2 なんだと？また横から入つてきやつて。

俳優3 あたし思ふんだけどね、その二人の再会のシーンはね——

俳優2 はつ！どうせまた妙に芝居がかつたやつなんだらう。

俳優3 品性と言つてもらいたいね。品性と。

俳優3 まあまあ。とにかく聞いてみようよ。ね。(俳優3に)それで二人はどうしたの？

俳優3 はい。こーいふんで……

俳優3 ——暴君ディオニスの前で、佳き友と佳き友は、二年ぶりで相逢うた。メロスは、友に一切の事情を語つた。無言で首肯き、メロスをひしと抱きしめた、セリヌンテイウス。友と友の間は、それでよかつた。セリヌンテイウスは、縄打たれ、メロスは、すぐに出発した。初夏、満天の星である。

オウジ うん。なかなかいいじゃない。

俳優3 ありがとうございます。

オウジ 続きを。

俳優3 ——メロスはその夜、一睡もせず十里の路を急ぎに急いで、村へ到着したのは、翌日の午前、陽は既に高く昇つて、村人たちは野に出て仕事を始めていた。メロスの十六の妹も、けふは兄の代りに羊群の番をしていた。よろめいて歩いて来る兄の、疲労困憊の姿を見つけて驚いた。さうして、うるさく兄に質問を浴びせた。

妹(俳優3) 兄上、如何いたしました？何故そのやうによろめきおやるのでございまするか？

メロス(俳優5) なんでも無い。

妹 したが兄上、

メロス 妹よ、私は市に用事を残して来た。またすぐ市に行かなければならぬ。

いいか妹、あす、おまへの結婚式を挙げる。早いほうがよからう。

妹 まあ。

メロス うれしいか。綺麗な衣裳も買つて来た。さあ、これから行つて、村の人たちに知らせて来い。結婚式は、あすだと。

俳優3 ——と言ひて、また、よろよろと歩き出すメロス。家へ帰つて神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらゐの深い眠りに落ちてしまつた。

メロス、眠る。

ト、暗くなる。

声がする。

俳優3 ——眼が覚めたのは夜だつた。メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。——つて、起きてください。ねえ、オウジ。ねえ。

ト、明るくなる。

オウジ、目覚める。

オウジ ん？？

俳優3 居眠りなんかしないでくださいよ。

オウジ ああ、ごめん。

俳優3 続けますよ。今度は、メロスが花婿の家を訪れるところです。

オウジ うん。

婿の家となる。

メロス まあ、お願いがあるんだが。

婿(俳優4) なんです。兄上。

メロス 実は、少し事情があつて、結婚式を明日にして欲しいのだ。

婿 え？いや、それはいけない、こちらには未だ何の仕度も出来ていない、せめて葡萄の季節まで待つてくたされい。

メロス いやいや、待つことは出来ぬ、どうか明日にしてくれ給へ。

俳優3 ——「いえいえ、なりませぬ」「いやいや、頼む」「いえいえ」「いやいや」と、夜明けまで議論をつづけて、やつとメロスは、どうにか婿をなだめ、すかして、説き伏せた。

結婚式は、真昼に行はれた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだころ、黒雲が空を覆ひ、ぼつりぼつり雨が降り出し、やがて車軸を流すやうな大雨となつた。祝宴に列席してゐた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持を引きさて、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのも怵へ、陽気に歌をうたひ、手を拍つた。

村人たちが、祝ひの歌を歌ひ、祝宴は乱れ華やかになる。

それを見てゐるメロス。

メロス ああ、私は一生このままここにゐたい。この佳き人たちと生涯を暮して行きたい。いやいや、しかし、いまは、このからだ、自分のものであつて、自分のものでは無い。ままならぬ事なのだ。うむ、行こう。行かねばなるまいぞ。だが、あすの日没までには、まだ十分の時が在る。一時、一眠りし、それからすぐに出発しよう、その頃には、雨も小降りになつていようぞ。

メロスは、妹と花婿に近づき、

メロス 妹。私は疲れてしまつたから、ちよつとご免かうむつて眠りたい。眼が覚めたら、すぐに市に出かける。大切な用事があるのだ。なあ妹よ、私がいなくても、もうおまへには優しい亭主があるのだから、決して寂しい事は無い。

妹 如何なさつたのです、兄上？

メロス いや、何でも無い。とにかくおまへに言ひたいのはな、

妹 ええ。

メロス ……うん。おめでとう。それだけだ。

妹 兄上。

メロス よかつたな。

妹 (首肯いて) ありがとうございます。

メロス (婿の肩をたたいて) 仕度の無いのはお互さまさ。私の家にも、宝といつては、羊と、それにこの妹だけだ。他には、何も無い。全部あげよう。それからもう一つ、メロスの弟になつたことを誇つてくれ。

婿 (首肯いて) わかりました。

メロス うん。

俳優3 ——メロスは笑つて村人たちにも会釈して、宴席から立ち去り、羊小

屋にもぐり込んで、死んだやうに深く眠つた。

メロス、眠る。

ト、暗くなる。

声がする。

俳優4 ——眼が覚めたのは翌日の薄明の頃である。

——つて、また寝ておしまいになつたよ、オウジ。

俳優2 オウジ。

俳優1 起きてください。

俳優3 ねえつてば。

俳優5 オウジ。

ト、明るくなる。

オウジ、目覚める。

オウジ ああ。ごめん。なんか、つい……。最近ボク、なんかね、眠たくてしようがないんだ。なんでなんだろう……。さ、続き、やろう。次、誰がメロスになる？

俳優4 私です。オウジ。それぢやあいきますよ。ここはやはりミュージカル仕立てで——

音楽が流れる。

俳優4 ——眼が覚めたのは翌日の薄明の頃である。メロスは跳ね起き、

メロス(俳優4) 南無三、寝過したか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分間に合ふ。けふは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやらう。さうして笑つて磔の台に上

つてやる。

俳優4 —— 雨も、いくぶん小降りになつてゐる様子である。身支度はできた。さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振つて、雨中、矢の如く走り出た。

俳優4、歌いながら走る。

♪

私は 今宵

殺される

殺される

為に走るのだ

身代りの

友救ふ

為に走るのだ

あの王の

奸佞邪智を

打ち破る

為に走るのだ

走らなければ

ならぬのだ

さうして 私は

殺される

さらば ふるさと

ふるさと さらば

俳優4 —— 若いメロスは、つらかつた。幾度か、立ちどまりそうになつた。

「えい、えい」

と大声挙げて自身を叱りながら走つた。

村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には、雨も止み、

日は高く昇つて、そろそろ暑くなつて来た。

♪

ここまで来れば

大丈夫

もはや故郷（くに）への

未練など無い

妹たちは

きつと きつと

佳い夫婦

になるだらう

私には

いま なんの気がかり

も無い筈

まつすぐに

王城に行き

着けば それでよい

そんなに急ぐ

必要も無い

ゆつくり歩かう

ゆつくりと

メロス、歩きます。

持ちまへの呑気さを取り返し、好きな小歌をいい声で歌

ひ出す。

♪

へびいーろーてえーしよん

三味線の音。

俳優5が語りだす。

俳優5 ——さて、呑気なメロス

ぶらぶら歩き 二里三里

そろそろ半ばに 到りし頃

降つて湧いたる災難 メロスの足は

はた とまとつた

見よ 前方の 川を

きのふの豪雨で 水源地は氾濫し

濁流滔々と 下流に集り

猛勢一挙に 橋を破壊し

だうどうと 響きをあげる 激流が、

木葉微塵に 橋桁を 跳ね飛ばしていた

彼は茫然と 立ちすくみ

あちらこちらと 眺めまはして

声を限りに 呼びたてて

だが繋舟は 残らず浪に 浚われて

渡守りの 姿も見えない

流れはいよいよ ふくれ上り

海のやうに なつてゐる。

メロス 川岸にうづくまり

男泣きにも 泣きながら

ゼウスに手を挙げ 哀願す

メロス (俳優3) ああ、鎮めたまへ、荒れ狂ふ流れを！ 時は刻々に過ぎて

行く。太陽も既に真昼時だ。あれが沈んでしまはぬうちに、王城に行き着く
ことが出来なかつたら、あの佳き友達が、私のために死んでしまふのだ。

俳優5 ——濁流は

メロスの叫びを 笑うが如く、

ますます激しく 躍り狂う

浪は浪を呑み 捲き 煽り立て

さうして時は 刻一刻と 消えて行く

今はメロスも 覚悟した

メロス 泳ぎ切るより他に無い。

俳優5 ——ああ、神々も 照覧あれ！

メロス 濁流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、いまこそ發揮して見せる。

俳優5 ——メロスはざんぶと 流れに飛び込み

百匹の大蛇のやうに のた打ち狂う

浪を相手に 必死の闘争を 開始した。

満身の 力を腕に

押し寄せ渦巻き 引きずる流れを

なんのこれしき

掻きわけ掻きわけ めくらめつばふ

獅子奮迅の 人の子の姿には

神も哀れと 思つたか

ついに憐愍を 垂れてくれた

押し流されつつも

見事 対岸の 樹木の幹に

すがりつき

メロス ああ、ありがたい。

俳優5 ——メロスは

馬の如くに 胴震い

すぐまた先きを 急いだ

メロス 一刻といえども、むだには出来ない。陽は既に西に傾きかけてゐる。

俳優5 —— ぜいぜい荒い 呼吸（いき）をしながら 峠をのぼり
のぼり切つて ほつとした時 突然に
目の前に 一隊の山賊が 躍り出た

山賊（俳優1） 待て。

メロス 何をするのだ。私は陽の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放せ。

山賊（俳優2） どっこい放さぬ。持ちもの全部を置いて行け。

メロス 私にはいのちの他には何も無い。その、たつた一つの命も、これから王にくれてやるのだ。

山賊（俳優4） その、いのちが欲しいのだ。

メロス さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしてゐたのだな。

俳優5 —— 山賊たちは

ものも言わずに一斉に 棍棒を振り挙げた

メロスはひよいと からだを折り曲げ

飛鳥の如く 身近かの一人に 襲ひかかり

その棍棒を奪ひ取り

メロス 気の毒だが正義のためだ！

俳優5 —— 猛然一撃 たちまち

三人を殴り倒して

残る者 ひるむ間に

さつさと走つて 峠を下りた

一気に峠を 駆け降りて

流石に疲労し 折からの

午後の灼熱の太陽が

まともにかつと 照つて来て
メロスは幾度と 眩暈を感じ

メロス これではならぬ

俳優5 —— と気を取り直し よろよると

二、三歩あるき ついに

がくりと膝を 折つた

立ち上る事が 出来ぬのだ

天を仰いでくやし泣きに 泣き出した

俳優1 ああ、あ、濁流を泳ぎ切り、山賊を三人も撃ち倒し韋駄天、ここまで

突破して来たメロスよ。

俳優2 真の勇者、メロスよ。

俳優4 今、ここで、疲れ切つて動けなくなるとは情無い。

俳優1 愛する友は、おまへを信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。

俳優2 おまへは、稀代の不信の人間、まさしく王の思ふ壺だぞ。

俳優5 —— と自分を叱つて みるのだが

全身萎えて もはや

芋虫ほどにも 前進かなはぬ

路傍の草原に ごろりと寝ころがった

身体疲労すれば 精神も共にやられる

勇者に似合わぬ 不貞腐れた根性が

心の隅に 巢喰つた。

メロス もう、どうでもいい

俳優1が手紙を読む。

メロス（俳優1）—— 拝啓。セリヌンティウス

セリヌンティウスよ、ゆるしてくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を、欺かなかつた。私たちは、本当に佳い友と友であつたのだ。いちどだつて、暗い疑惑の雲を、お互い胸に宿したことは無かつた。いまだつて、君は私を無心に待つてゐるだろう。ああ、待つてゐるだろう。ありがとう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。

けれどセリヌンティウス、私は走つたのだ。君を欺くつもりは、みぢんも無かつた。信じてくれ！ 私は急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りて来た。さうして動けなくなるまで走つて来たのだ。ああ、この上、私に望み給ふな。私は負けたのだ。だらしが無い。笑つてくれ。

王は私に、ちよつとおくれて来い、と耳打ちした。おくれたら、身代りを殺して、私を助けてくれると約束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になつてみると、私は王の言うままになつてゐる。私は、おかれて行くだろう。王は、ひとり合点して私を笑ひ、さうして事も無く私を放免するだろう。そうなつたら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切者だ。地上で最も、不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがいない。

俳優2 と、ここまで書いた時です。ああ、その時です。背後のほうから、誰やら金槌で釘を打つ音が、幽かに、トカトントンと聞えました。それを聞いたとたん、眼から鱗が落ちるとはあんな時の感じを言うのでしようか、悲壮も厳肅も一瞬のうちに消え、私は憑きものから離れたように、きよろりとなり、眼前の風景がまるでもう一変してしまつて、何ともはかない、ばからしい気持になつたのです。

トカトントン

メロス 正義だの、信実だの、愛だの、考へてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法だ。

トカトントン

メロス ああ、何もかも、ばかばかしい。私は、醜い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。

トカトントン

俳優2 そして私は四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまつたのです。

ト、暗くなる。

声が聞こえる。

俳優1 ふと耳に、潺潺、水の流れる音が聞えた。

俳優2 そつと頭をもたげ、息を吞んで耳をすました。

ゆつくりと明るくなる。

俳優3 すぐ足もとで、水が流れてゐるらしい。

俳優4 よろよろ起き上つて、見ると、

俳優5 岩の裂目から滾々と、

俳優1 滾々と、

俳優2 滾々と、

俳優3 何か小さく囁きながら清水が湧き出てゐる

俳優4 のである。

俳優5 その泉に吸い込まれるやうにメロスは身をかがめた。

俳優1 水を両手で掬つて、一くち飲んだ。

俳優2 ほう

俳優3 と長い溜息が出て、夢から覺めた

俳優4 やうな気がした。
俳優5 (メロス) 歩ける。
俳優1 (メロス) 行かう。
俳優2 肉体の疲労恢復と共に、わづかながら希望が生れた。
俳優3 斜陽は赤い光を、樹々の葉に投じ、
俳優4 葉も枝も燃えるばかりに輝いてゐる。
俳優5 (メロス) 日没までには、まだ間がある。
俳優1 (メロス) 私を、待つてゐる人があるのだ。
俳優2 (メロス) 少しも疑はず、静かに期待してくれてゐる人があるのだ。
俳優3 (メロス) 私は、信じられてゐる。
俳優4 (メロス) 私の命などは、問題ではない。
俳優5 (メロス) 死んでお詫び、
俳優1 (メロス) などと気のいい事は言つて居られぬ。
俳優2 (メロス) 生きて、
俳優3 (メロス) 生きて、
俳優4 (メロス) 私は、信頼に報いなければならぬ。
俳優5 (メロス) いまはただその一事だ。
俳優1 走れ!
俳優2 メロス。
俳優3 (メロス) 私は信頼されてゐる。
俳優4 (メロス) 私は信頼されてゐる。
俳優5 (メロス) 先刻の、あの悪魔の囁きは、あれは夢だ。
俳優1 (メロス) 悪い夢だ。
俳優2 (メロス) 忘れてしまえ。
俳優3 (メロス) 五臓が疲れてゐるときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。
俳優4 メロス、おまへの恥ではない。
俳優5 やはり、おまへは真の勇者だ。
俳優1 再び立つて走れるやうになつたではないか。
俳優2 (メロス) ありがたい!

俳優3 (メロス) ああ、陽が沈む。
俳優4 (メロス) ずんずん沈む。
俳優5 (メロス) 待つてくれ、ゼウスよ。
俳優1 路行く人を押しつけ、跳ねとぼし、
俳優2 メロスは黒い風のやうに走つた。
俳優3 野原で酒宴の、その宴席のまつただ中を駆け抜け、
俳優4 酒宴の人たちを仰天させ、
俳優5 犬を蹴とぼし、
俳優1 小川を飛び越え、
俳優2 少しずつ沈んでゆく太陽の、
俳優3 十倍も早く走つた。
俳優4 一団の旅人と颯つとすれちがつた瞬間、
俳優5 不吉な会話を小耳にはさんだ。
俳優1 いまごろは、あの男も、磔にかかつてゐるよ。
俳優2 (メロス) ああ、その男、その男のために私は、いまこんなに走つてゐるのだ。
俳優3 その男を死なせてはならない。
俳優4 急げ、メロス。
俳優5 おくれてはならぬ。
俳優1 愛と誠の力を、いまこそ知らせてやるがよい。
俳優2 風態なんかは、どうでもいい。
俳優3 メロスは、いまは、ほとんど全裸体であつた。
俳優4 呼吸も出来ず、二度、三度、口から血が噴き出た。
俳優5 (メロス) 見える。
俳優1 (メロス) 見える
俳優2 (メロス) 見える
俳優3 はるか向うに小さく、シラクスの市の塔楼が見える。
俳優4 塔楼は、夕陽を受けてきらきら光つてゐる。

フィロストラトスが、メロスを追いかけて走つてくる。

フィロストラトス（俳優5） ああ、メロス様。
メロス（俳優1） 誰だ。

フィロストラトス フィロストラトスでございます。貴方のお友達セリヌンテ
イウス様の弟子でございます。

メロス ああ、お前か。

フィロストラトス もう、駄目でございます。むだでございます。もう、やめ
て下さい、走るの。もう、あの方をお助けになることは出来ません。

メロス いや、まだ陽は沈まぬ。

フィロストラトス ちょうど今、あの方は死刑になりました。

メロス（足を止めて） え？……ほんたうか？

フィロストラトス ええ。つい今しがた。もうちよつとでも、早かつたなら、
間に合つたのでせうが……。もう、駄目でございます。むだでございます。
／しゅーりょー

——GAME OVER

オウジはため息をつき、席を立つ。

メロスは、けれど、また走り出す。

オウジ え？

フィロストラトス 何をなさるのです。やめて下さい。走るの、やめて下さ
い。もうあの方はいないので。いまはご自分のお命が大事です。

メロス（走る）

フィロストラトス ああ、あなたは気が狂つたか。メロス様 あなたはもう間
に合わなかつたのですよ。

メロス 間に合う、間に合はぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。
私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいものの為に走つてゐるのだ。

走る。

走る。

メロスは
走る。

フィロストラトスは懸命に追ひかける。

フィロストラトス わかりました。わかりました。正直に言ひます。私は嘘を
つきました。……まだセリヌンテイウス様は生きていらつしやいます。

メロス ほんたうか？

フィロストラトス あの方はかうして私を使いをやつて、あなたを城に來させ
ないやうにしやうとしてゐるのです。

メロス なぜだ？

フィロストラトス あなたを信じていらつしやるからです。あなたが來ること
を。あの方は、あなたの身代わりになり、王にそのいのちをくれてやらうと
していらつしやるのです。

メロス セリヌンテイウス……。ついて来い！フィロストラトス。私は走る。
それだから、走る。信じられているから走るのだ。

俳優2 まだ陽は沈まぬ。

俳優3 最後の死力を尽して、メロスは走つた。

俳優4 メロスの頭は、からつぽだ。

俳優5 何一つ考へていない。

俳優1 ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて

俳優2 走つた。

俳優3 陽は、ゆらゆら地平線に没し、まさに

俳優4 最後の一片の残光も、消えよう

俳優5 とした時、

俳優1 メロスは疾風の如く刑場に突入した。

俳優2 間に合つた。

メロス（俳優3） 待て！その人を殺してはならぬ。メロスが帰つて来た。約束のとおり、いま、帰つて来た！

俳優4 と大声で刑場の群衆にむかつて叫んだ

俳優5 つもりであつたが、

俳優1 喉がつぶれて噎れた声が幽かに出たばかり、

俳優2 群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。

俳優3 すでに磔の柱が高々と立てられ、縄を打たれた

俳優4 セリヌンティウス！

俳優5 は、徐々に釣り上げられてゆく。

俳優1 メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、

俳優2 濁流を泳いだ

俳優3 やうに群衆を掻きわけ、掻きわけ、

メロス（俳優4） 私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにゐる！

俳優5 と、かすれた声で精一ぱいに叫びながら、

俳優1 ついに磔台に昇り、

俳優2 釣り上げられてゆく友の両足に、

俳優3 齧りついた。

俳優4 群衆は、どよめいた。

全員 あつぱれ。

全員 ゆるせ、

俳優5 と口々にわめいた。

俳優1 やがて、セリヌンティウスの縄は、ほどかれた。

メロス（俳優2） （眼に涙を浮べて）セリヌンティウス。私を殴れ。ちから

一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若し私を殴つてくれなかつたら、私は君と抱擁する資格さへ無いのだ。殴れ。

セリヌンティウスは、すべてを察した様子で首肯き、メロスの右頬を殴る。

セリヌンティウス（俳優3） （優しく微笑み）メロス、私を殴れ。同じくらゐ音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たつた一度だけ、ちらと君を疑つた。生れて、はじめて君を疑つた。君が私を殴つてくれなければ、私は君と抱擁できない。

メロスはセリヌンティウスの頬を殴る。

二人 ありがたう、友よ。

二人同時に言ひ、ひしと抱き合い、それから嬉し泣きにおいおい声を放つて泣いた。
群衆の中からも、歎歎の音が聞えた。

俳優4 暴君ディオニスは、

俳優5 群衆の背後から二人の様を、

俳優1 まじまじと見つめてゐたが、

俳優2 やがて静かに二人に近づき、

俳優3 顔をあらためて、かう言つた。

王（俳優4） おまへの望みは叶つたぞ。おまへらは、わしの心に勝つたのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかつた。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願ひを聞き入れて、おまへの仲間の一人にしてほしい。

俳優5 どつと群衆の間に、歓声が起つた。

全員 万歳、万歳、万歳。

俳優1 ひとりの少女が、

俳優2 緋のマントをメロスに捧げた。

俳優3 メロスは、まごついた。

俳優4 佳き友は、気をきかせて教へてやった。

セリヌンティウス(俳優3) メロス、早くそのマントを着るがいい。君は、まっばだかぢやないか。この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。

俳優5 勇者は、

俳優4 メロスは、

俳優3 彼は、

俳優2 君は、

俳優1 私は、

全員 ひどく赤面した。

ト、暗くなる。

潺々、水の流れる音が聞える。

ゆつくり明るくなると、オウジが眠つてゐる。

それを見つめる五人の男。

オウジ ああ、ごめん。また眠ってしまった。ん？はなしはどごまでいった？

セリヌンティウスは助かったんだよね？

男たち ?

オウジ え？

男1 夢を、見たのか？

オウジ 夢？

男1 悪い夢だ。

男2 忘れてしまえ。

男3 五臓が疲れてゐるときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。

男4 急げ、メロス。

男5 おくれてはならぬ。

男1 愛と誠の力を、いまこそ知らせてやるがよい。

男2 風態なんかは、どうでもいい。

男3 その男を死なせてはならない。

オウジ ……夢？夢だったの、さっきの……。え？じゃあ、まだ……。あ…

…まだ陽は沈んでいない……。そっか……。今、じゃあ、ボクは夢から覚めたんだ……。さ、じゃ、続けよう。今度は誰がメロスをやる？

男2 ……おかしなことをいふ。

オウジ 何が？

男3 だって、メロスはお前ぢやないか。

オウジ え？……ボクが、……メロス。

男1 眼が覚めたのは翌る日の薄明の頃である。

男2 メロスは跳ね起き、

男3 南無三、寝過ぎたか、

男4 いや、まだまだ大丈夫、

男5 これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分間に合う。

男1 けふは是非とも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。

男2 さうして笑つて磔の台に上つてやる。

男3 雨も、いくぶん小降りになつてゐる様子である。

男4 身仕度は出来た。

男5 メロスは、ぶるんと両腕を大きく振つて、雨中、矢の如く走り出た。

男たち 走り出た。

オウジ、走り出す。

男1 路行く人を押しわけ、跳ねとばし、

男2 メロスは黒い風のように走った。

男3 野原で酒宴の、その宴席のまつただ中を駆け抜け、

男4 酒宴の人たちを仰天させ、

男5 犬を蹴とばし、

男1 小川を飛び越え、

男2 少しずつ沈んでゆく太陽の、

男3 十倍も早く走った。

オウジは、走つてゐる。

男たちは、丁寧にお辞儀をすると、消へてゆく。

声が聞こえる。

——だけど、あたしは、あの人を好きです。あの人は、情の深い人です。情が深いから、自分を、もてあましてしまつて、心も言葉も乱れるんです。

——だけど、俺は、あいつ、好きだよ。あいつは、情の深いやつだよ。情が深いから、自分を、もてあましてしまつて、心も言葉も乱れるんだと思う。

——だけど、先生は、あなたを好きです。あなたは、情の深い人です。情が深いから、自分を、もてあましてしまつて、心も言葉も乱れるんです。

——だけど、お父さんは、お前を好きだよ。お前は、情の深い子だ。情が深いから、自分を、もてあましてしまつて、心も言葉も乱れるんだよ。

——だけど、あたしは、あの子を好きです。あの子は、情の深い子です。情が深いから、自分を、もてあましてしまつて、心も言葉も乱れるんです。

オウジ ボクを……、ボクを待っている人がある。少しも疑わず、静かに期待してくれている人がある。ボクは、信じられている。ボクは走る。……生きる。それだから、生きるのだ。信じられているから生きるのだ。

赤く大きい夕陽ばかりを見つめながら、オウジは走る。

オウジ まだ間に合う。……どうにか、なる。

——
おわり
——

〔引用・参考文献〕

太宰治 「新ハムレット」 「走れメロス」 「トカトントン」

「女の決闘」 「葉」 「お伽草紙」 「二十世紀旗手」 ほか